

2012 年度次世代人文社会学育成プログラム 派遣報告書（日本語）

東京大学文学部 3 年中井創太

派遣先：フランス（ブザンソン）、応用言語学センター（CLA）

派遣期間：2012 年 7 月 28 日～8 月 27 日

研究成果

(1)当初の計画概要

中世フランスの社会史・文化史 ～宗教的イメージの観点から～

**L'histoire sociale et culturelle de la France médiévale ~en aspect d'image religieuse~**

12～13 世紀のフランスにおいて、フランス国内でもローマ・カトリックが教皇権の優勢の下で最盛期を迎え、華麗な彫刻の施されたロマネスク・ゴシック建築やアイルランドから派生した幻視譚など、この時期に特有の文化が階級を問わず普及した。これらはまた、12 世紀ルネサンスなど外部世界からの影響を受けて変化したが、そのほとんどが同時代の知識人たる聖職者から民衆に伝えられ普及したものであったと言える。聖職者は教会や野外での説教と教会の絵画・彫刻を通じてミサに訪れる民衆を教化し、彼らが抱くキリスト教的イメージ、宗教的世界観を形成した張本人である。そこで、彼ら聖職者の受容した知識・技術を探ることで、中世ヨーロッパにおける社会システムと文化受容の諸相を明らかにしたい。

(2)実際に達成された成果

現地での活動は主に、派遣先の CLA での語学研修と個人的に訪れた各都市（リヨン、ディジョン、ロンシャン、パリ）での実地調査である。

語学研修ではもちろん慣用表現を含め、個人ではなかなか向上させにくいフランス語の特に会話・表現力に重点を置いて語学力向上を図った。その過程で、各国の言語との比較もあって、ヨーロッパの言語やフランス語に特有の表現・言い回しを学び、その心性の一端を垣間見ることができた。また、選択科目で *socio-culturelle* という授業を選択し、政治制度・宗教・歴史・食などフランスの文化一般を学ぶとともに、かねてより興味があった文化人類学的な視点で各国文化の対比を行った。実地調査では、かねてからの希望であった教会巡りを行い、その建築技術、美術作品を見学した。それに加え、博物館を訪れることで建設当時の町並みと人々の生活の様子を知ることができ、研究計画に書いたような当時の社会を、多少なりとも具体的にイメージすることができた。

幸いフランスには歴史と文化を尊重する風土が根付いており、比較的容易に身を持ってこれらの体験をすることができた。私が研究において重点を置いている実地での「経験」については、それなりに従来の計画通り達成できたのではないかと思う。語学力は継続のたまものであると思うので、今回の機会と得た友人たちとともに、日々鍛錬に励みたい。

(3)今後の研究展望

今後としては、まず文献を読むことを重視したい。現在 3 年生の身としては、文献と言って

もまだ基本文献さえおろそかな状態であるので、まずは卒業論文に必要な基本文献と外国語文献を読むことが最優先課題である。ただただ文献を読むだけでなく、美術作品や建築物、町並みといった非文字史料の存在も大切にしたい。これは私の研究計画の中心主題にもあるが、当時の人々が何をイメージしていたのかという問題と直結すると信じている。また、このような問題を考える場合、歴史学だけではなく人類学、心理学の知識も必要になるだろう。これらはかねてより興味があった分野なので、今後も意欲的に文献調査や読解に取り組みたい。